

2020. 11. 8. 聖霊降臨節第24主日礼拝式説教

ルカ福音書講解説教

聖書：ルカによる福音書15章 1-7節

『キリストの愛』

ルカによる福音書15章には主イエスのたとえ話が三つ連続して語られています。しかも、それはそれぞれが独立したたとえとして、豊かで恵みにあふれたメッセージを語っているのと同時に、三つが有機的につながって語られています。つまり15章全体を一つのたとえとして読むことも可能にしています。そのことも念頭に置きつつ、今朝は1節から7節の最初のたとえに心を向けて、聞いていきたいと思います。

「あなた方の中に、百匹の羊を持っている人がいて、その一匹を見失ったとすれば、九十九匹を野原に残して、見失った一匹を見つけ出すまで捜し回らないだろうか。そして、見つけたら、喜んでその羊を担いで、家に帰り、友達や近所の人々を呼び集めて、『見失った羊を見つけたので、一緒に喜んでください』と言うであろう」これがたとえの全文です。短い話です。話の筋はわかりやすく、小さな子どももわかるような、親しみやすい語り口です。しかし、よく読むと、いろいろなことを気づかされていきます。

マタイによる福音書にも同じようなたとえ話があります。しかし読み比べてみるとずいぶん違いがあります。その一つは、マタイではルカが「見失った羊」と言っているのを、「迷い出た羊」と言っていることです。マタイは羊が迷い出た、迷子になった、と言っているのです。実際放牧している時には、群れの中の一匹が迷子になるということはめずらしいことではなかったかもしれませんが。百匹もいるのですから。しかしルカのほうは、「見失った羊」と語っていて、これは羊飼いの側の視点、ということになります。つまりマタイとルカでは羊を見る視点が違うということです。ルカは、ただ単に迷子になってしまったということではなく、「失われた」という羊飼いから見た一匹が記されている。ところが、この「見失った」という言葉なのですが、元の言葉を調べると驚くのです。それはこの言葉は単に見失う、という意味だけでなく、滅び、滅亡する、消失する、無くなる、という意味があるからです。羊は確かに迷い

出た。そして羊飼いかからすれば見失った。しかし、中東の荒れ野の土地で、羊が迷子になり、群れから離れたらどうなるのか。それは、他の動物に食い殺されたり、水もなく、飢え死にしたり、つまりは滅び、滅亡、無くなってしまうのです。羊というのは、もともととても無防備な動物です。攻撃的な動物でもない。羊飼いのもとを離れ、群れを離れたら、それは即いのちにかかわる。滅んでしまう。そういう背景がこの「見失う」という言葉には込められている。

いろんな機会にお話ししてきましたが、羊は近眼です。それも極度の近眼。だから、羊は自分の前の羊のお尻を見て移動する。ところが、草を食べていたりして、ふと目を上げて前の羊が移動してそのお尻が見えなくなれば、もうそれで迷子なのです。しかし迷子で済むならいい。迷子になった羊のいのちは危機に瀕するのです。

羊飼いはそのことをよく知っていました。羊よりも知っている。というより、羊は自分のことなのに、ほとんど何もわかっていない。羊飼いは懸命に捜します。ひたすらに捜します。見つかるまで捜すのです。一方、羊は自分が迷子だという自覚もないままに、自由気儘に過ごしているだけだったかもしれない。悪びれていなかったかもしれない。しかし羊飼いは探し続けるのです。

見失った羊を探し出し、羊飼いは喜びにあふれる。その喜び方は大変なもので、友達や近所の人たちを呼び集めて、一緒に喜んでくれ、というほどのものでした。

さて、このたとえ話はわたしたちにいったい何を語ろうとしているのでしょうか。

とにかくストレートに響いてくるのは、迷い出たものを捜し続ける方の物語だということです。「九十九匹を野原に残して」ということがどれほどのリスクを払うことになるのか、わたしたちにはよくわからないのですが、この捜す方は、そのことにかまわず捜し続けてくださる。探さなくては羊の命が奪われてしまうから、無くなってしまうから、ただひたすらに捜し続ける、そのことを語る物語です。

迷い出た羊とは、わたしのこと、わたしたちのことです。迷い出ているという自覚がある場合もあるかもしれないけれど、多くの場合ほとんどない。迷い出ているという自覚がないだけでなく、場合によっては、自分は神に聞き従っているという思い込みの中にあるかもしれない。自分勝手な理屈で神に従っているつもりで、実は神のもとから離れ、ふらふらしている、人間は羊の迷子

よりももっとたちが悪い。羊が近眼ということも、人間と深く重なってくる。目の前のことしか見えない。いや目の前のこともぼんやりとしか見えないのですから。

しかし、捜し続けてくださる方は、羊の自覚や気持ちにかかわらず、ひたすらに捜し続けてくださる。迷い出たものは、捜してくださる方がいなければ、本来の場所に戻ることは叶わない。そしてそれは滅びを招いていく。

探し続ける方は、迷い出たものを見出すと、大いに喜んでくださる。このたとえはその喜びの大きさを物語る。つまりこのたとえは、捜してくださる方がいることと、その方の大きな喜びについて語る物語なのです。

なぜこの方は見つかるまで捜し続けてくださるのか。そのことをあらためて考えてみます。親だって自分の子どもが迷子になったら、見つかるまで探す、親の愛だってそうなんだ、ましてや神の愛は、見つけるまで探すんだ、と説明する人がいます。わかりやすい説明です。しかし、親の愛の延長というだけでは語りつくせないものがここにはあります。

このたとえはもともと、主イエスが罪人という烙印を押されている人々を受け入れて、話をしているところにファリサイ派の人々や律法学者が来て、この人は罪人たちを迎えて食事まで一緒にしている、といったことがきっかけになって話されたたとえです。

なぜこんな人たちと交わるんだ、こんな連中は放っておけばいい、というのが彼らの言い分だった。もっと踏み込んでいえば、こんな連中は神の罰を受けて死ぬほかない、と思っていたのです。罪人は神の罰を受ける、そして罰としての死を迎える、彼らだけでなく、多くの人がそう考えて放っていたのです。

しかし主イエスがこのたとえで語っておられることは、「わたしは、その罪人の一人を捜し、見出し、神の御許に連れ戻し、ともにある喜びを分かち合いたい」というものでした。それは徴税人や罪人と呼ばれている人だけではない。ファリサイ派も、律法学者も、神のもとから離れている人を一人一人を捜し出し、神のもとに連れ帰るのだ、と主は言われているのです。

ここにあるのは、迷子になった羊を捜して見つけ、喜ぶ、という話です。しかし、自分の罪ゆえに迷子になった者が、滅びに直面するのなら、その滅びをわが身に受けてでも、この見失ったものを見出し、神の御許に連れ帰る、とい

う意志がこのたとえの中には満ち溢れている。確かに、迷子の羊を捜す話です。けれどもここにはキリストの十字架の覚悟も、意思も、溢れている。なぜなら、十字架は単に悲劇的なことではなく、罪人を救い、神と共に歩むものとするという喜びにあふれたものであり、希望に満ちたものだからです。

7節のキリストの言葉については、15章のほかのたとえを読む中で、考えたいと思いますが、今朝のたとえを歌にしたものがこども讃美歌に入っています。4番まであるその歌詞の最後は、こうなっています。「とうとうやさしい羊飼いは、迷子の羊を、見つけました。抱かれて帰るこの羊は、喜ばしさに踊りました」羊飼いに見つけていただいて、抱かれて神のもとに帰る、それがうれしくて、喜ばしく、羊は思わず踊りだしてしまった、というのですが、実際わたしたちは、見出されて喜び踊りだしているのでしょうか。捜し出し、見出し、喜んでくださる主の大きな愛に、まっすぐに応えられるわたしたちでありたいと思います。